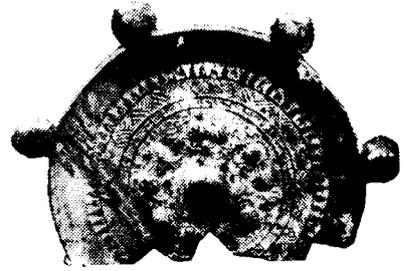


文化財 やまと

大和町文化財保護協会発行



七 鈴 五 獣 鏡

「東氏郡上入部八百年」

会 長 齋 藤 武 生

来年は、千葉東氏が山田庄へ入部してから八百年を迎えます。

入部の年代説は承久元年・承久二年・承久三年・承久年中・承久年中以外等の各説がありますが、私は承久三年六月一四日の宇治川の戦い等で千葉一族千葉胤行・胤朝・胤康等が活躍し、その功績により山田庄が加領されたことから、承久三年（一二二二）承久の乱を入部八百年の根拠としています。

この記念すべき八百年を迎えるに当たって、日頃思っていることを記述してみます。

● 入部前の郡上とは
当時の国土は、律令制度の基に私有地が認められていなかった。土地の大部分は、天皇・公家・社寺領の荘園となっていた。その中で郡上山田庄の荘園も天皇所有であり、持ち主は待賢門院から上西門院へ、そして後白河院の皇女の宣陽門院へと伝領されていた。

● 荘園の範囲は八幡町の一部、大和町、白鳥町・高鷲町と推定

されている。その他の地域は、北方に鷲見一族の鷲見郷、白鳥町長滝寺の寺領が大部あり複雑な地域となっていた。

● 神社の状況は
入部当時山田庄内の大和町内には、

①鳥字宮前・桑原地内の三ヶ所
②大間見字為氏・重光・戸屋野地内の三ヶ所
③中神路地内の一ヶ所
④下栗巢字領家地内の一ヶ所
⑤牧字森脇地内の一ヶ所

合計九ヶ所の各地に白山神社が四社、八幡神社が三社、多賀神社及び七天神社の各一社が鎮座していた。

● 何故あの地に阿千葉城
山田庄に先遣隊として千葉一族の野田左近将監信正をはじめ家臣団及びその一族の家人約三百人が入部していた。

○ 疑問その一 何故、剣の山（標高三七〇m）に築城したのか
当時は北方には大きな勢力として、承久の乱の時に東軍として一緒に戦った鷲見一族の鷲見郷が、越前には朝倉一族が、更には白鳥長滝寺が所在していた。

○ 疑問二 何故、阿千葉城と名付けたのか
広辞苑では「按察使（あぜち）奈良時代に地方政治を監督する官命、養老三年に特定の国司の兼任とある。また「畦地」（あぜち）は分家とある。

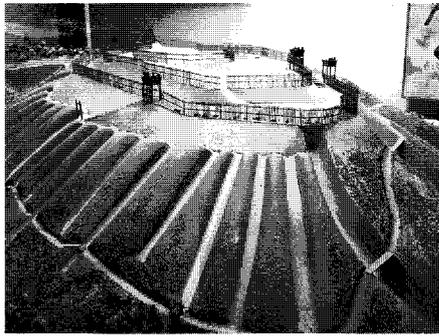
○ 疑問三 築城の間、胤行その家臣団はどこに居住していたのか
胤行は父重胤と同様に歌人であり実朝に信頼され、鎌倉にて実朝に仕えていた。よって山田庄に築城されるまでは鎌倉に留まっていたと思われる。

家臣その家人はというと、阿千葉城近くの剣・万場、更に落部地区を切り開き等して郡内の各地に居住していた。『図説郡上の歴史』（郡上の諸侍）には侍の名前が記載されている。

● 何故、篠脇城なのか
前述の情勢の中で、阿千葉城は出城的な位置に当たること、城が家臣団の居住地から離れたこと、生活面でも不便であつたこと、よって安全な要塞の地を探したと思われる。

篠脇城と館は東西約一km、南北約百mの山と川（栗巢川）に囲まれ、東の山裾は栗巢川の淵、西山裾も谷間となっており、

七鈴五獣鏡とは
岐阜県指定重要文化財であり六世紀中頃約一五〇〇年前のもの管理者 徳永多賀神社
鏡は、写真のように、全体の四分の一が欠損している。白銅製で、鏡面は光沢のある灰色を呈しており、文様のある面は外から鋸刃文帯、連続三角形文帯、偽銘帯があり、その内側に小さな五つに乳と形状不明な五獣を拜している。
直径一一・四cm、周囲に七つの鈴があつたが、そのうち三個が欠けている。鈴子は小石で、振るとかすかな音を立てる。



篠脇城跡復元 畝状空堀群

お気に入りの補助資料 二〇〇六年 三月 「二誌美濃わが街」より
見性院、郡上 出自 自説 を 聞く

山内一豊の妻見性院がどこで生まれたかについては、現滋賀県米原市飯（い）で土豪若宮喜助友興（ともおき）の娘として生まれたという近江出自説と、現岐阜県郡上市で郡上八幡城主遠藤盛数の娘として生まれたという郡上出自説がある。

今回は、郡上市八幡町大手町在住の山内一豊婦人顕彰会会長、川上朝史さんをお訪ねして、郡上説の詳細を語っていただいた。

山内一豊の妻千代は近江出生説もありますが、郡上生まれという説もあります千代さんの話が郡上で最初に出てきたのはいつ頃ですか

郡上の古いお寺とか旧家に、東家・遠藤家の系図が残っています、初代郡上八幡城主遠藤盛数の一番末の娘さんのところに、「山内津島守様室（しつ）」と書いたものがいくつか出てきました。

ですから一豊さんの奥さんは郡上の出だということが土壌としてはありましたが、一般の人に広まるというようなことはありませんでした。

『郡上郡史』が大正一一年に出ましたけれども、大正八年に起きた八幡北町の大火で資料が消失したり、監修者の異動などもあり、そのことは載せられませんでした。また通説は近江になっておりましたので、ことさらに異議を唱えるというところまでは

きませんでした。

昭和五九年に出ました『大和村史』その時に初めて蓄積された研究に新たな研究が付け加えられ、千代の郡上出生説が書かれました。

そのきっかけとなったのが、当時岐阜城館長であった郷浩先生です。県立図書館にある「秘聞郡上古日記」にも千代のこと載っているじゃないか、何で郡上は声を大きくして言わないんだとハツパを掛けられました。

『大和村史』に書かれたのが官本に書かれた初めですね。

遠藤家は東家の分家ですが、東家からの変遷を話してください

鎌倉時代に承久の乱のご褒美として、郡上山田の庄を千葉氏の一族東家が貰われることになって、東胤行（とうのたねゆき）の長男行氏（ゆきうじ）が郡上へ来られました。それからずっと郡上は約三四〇年の長きに渡って東家が治めておりました。

初代胤行は藤原定家（ていか）の孫娘をお嫁さんに貰われるなど和歌との繋がりが深い方でした。その血筋が七代後の常縁（つねより）に至るまで続き、東家代々の方は勅撰和歌集などに名を連ねております。

中でも有名なのが、連歌師飯尾宗祇（いとおそうぎ）に古今伝授をしました東常縁です。当時、常縁は古今和歌集研究の第一人者と云われた方でした。

東家の分家が遠藤家ですが、初代遠藤盛数の時に東家と遠藤家の争いが起こりました。盛数の兄胤縁（たねより）は、大和町の木越城というところにおりました。そこが遠藤家の本家だったわけですが、盛数はその分家

で、当時は美並村刈安におりました。永禄二年（一五五九）遠藤胤縁が八朔（はつさく）（八月一日）の祝いを東常縁がいる東殿山（とうどのやま）城へ持って行った帰りに、常堯（つねたか）が家来に命じて胤縁を鉄砲で撃ち殺すという事件が起きました。

兄さんが殺されたということで美並村にいた盛数が弔い合戦を起し、郡上を二分した戦いが始まりました。そしてついには本家である東家を、分家である遠藤家が滅ぼしてしまいました。

お千代さんが生まれたのがこの頃です。戦いに勝った盛数は八幡山に城を造りました。郡上城は後に八幡城と名前が変わります。盛数の奥方が誰かと言いますと東家一三代常慶の娘。ですから盛数が戦をした相手は自分の奥さんのお父さんなんです。

もう少し詳しく話していただくとういうことになりますか

東常縁は家系図を見ますと、十人近くの子どもが全部女の子ばかりなんです。長女のところ書いてあるのが盛数の奥さんになった方です。俗名は分かりません。

常慶は東家最後のお殿様と云つていい方ですが、女の子ばかり生まれ一人あった男の子が常堯です。常堯

は男の子一人で甘やかされて、跡を継ぐ器量がないと義慶が判断していた

ようで、婿を取るような形で遠藤胤好の次男盛数を見込んで自分の長女と結婚させました。本当は婿に貰ったかったのしょうけど、盛数がうんと言わなかったようなんです。

それで先ほど言いましたように、盛数が東家を滅ぼして八幡城主になりました。千代さんが八幡城主の娘と云われるのは、そういうところからなんです。

今は東殿山と云いますが、八幡城の赤谷山で戦いがあったのが永禄二年。それから二年後の永禄四年に道三の息子義龍が急死して、どうも岐阜の方がごたごたしたようです。義龍の息子が龍興がおりましたが、彼は十三歳ぐらいたったので、この遠藤氏などもみんな岐阜へ守りに行っていました。それから何の病気が分かります。盛数は永禄五年一〇月一四日、岐阜で病死します。

盛数がなくなった時、長男の慶隆（よししたか）は十三歳でしたので、結婚しておりませんでした。御母さんには男の子が二人女の子が三人おりました。一番末の子が見性院になる人です

が、当時五歳か六歳。世話をする老臣たちが、嫡男の慶隆は若いし、もし攻められたら郡上は瞬間にやられてしまう。後ろ盾が必要だと相談しました。関市の安桜山城主であった長井半人（はんじん）に白羽の矢を立てた訳です。

彼は龍興の伯父さんにあたる人で六十歳を越えとる方だったと思います

が、当時は奥さんを亡くしてしました。

しかし千代さんのお母さんは誇り高い東常慶の娘さんですから、単人と結婚することには抵抗があったようです。本人も嫌だったようすし、郡上の記録にも慶隆がお母さんの再婚は嫌やと反対したということが書いてあります。けれども郡上を守るために結婚して欲しいという要請を受けてまして、お母さんは仕方なく再婚しました。

単人は義龍がいないので、若い龍興の實質的な後見人です。義龍のいなくなった隙を突いた信長の攻撃から単人が中心になって岐阜城を守り、信長に徹底抗戦しました。

永禄七年二月六日には、竹中半兵衛の稲葉山城乗っ取りがありました。『大和村史』を編纂されました野田直治先生がこの研究をしておられ小さな伝承でも拾われておりましたが、単人の屋敷は稲葉山の麓にあったそうです。いみじくもこの時に慶隆をはじめお母さん、そして子ども全部が稲葉山の単人の屋敷にあそびに行っていて、みんな揃っていたという記録があるそうです。

その後一家は山県郡の深瀬に避難しましたが、これが資料に残る最後の記録で、それ以降のことは全く分かりません。

慶隆は後に北方城主安藤守就（もりなり）の末娘と結婚します。安藤家の系図にそれが載っていますが、単人の肝入りで結婚したと伝わっています。

が、当時は奥さんを亡くしてしました。

す。結婚して翌年に女の子が生まれるんですが、慶隆の奥さんはお産で亡くなりました。

生まれた娘さんは郡上で育ち、大きくなつてから飛騨の高山城主金森可重(ありしげ)のお嫁さんになりました。その間に出来た子供が武家茶人で有名な金森宗和(そうわ)です。

教如(きょうにょ) 上人と友順尼(ゆうじゅんに)の話もありますね、そのことを話してください

単人と見性院のお母さんは再婚するんですけれども、夫の単人は信長と徹底的に戦い、永禄一〇年(一五六七)岐阜城が落城した後は近江の方へ齊藤龍興と共に流れていきます。最終的には元龜三年

(一五七二)八月、足利義昭の家来になつて攝津の白井河原で討ち死にします。

その頃、お母さんは千代さん連れてどこかへ行ったのではないかと考えているんですけど、記録がありませんので、実際のところはわかりません。遠藤義隆の奥さんと竹中半兵衛の奥さんが姉妹だったので、半兵衛さんのところへ行っていたことも考えられますね。

その後、単人が亡くなった後だと思えますが、お母さんは郡上へ帰られて美並村の乗性寺(じようしようじ)という寺に入られました。その頃、千代さんがどうしていたかは分かりません。

乗性寺はどういう寺かと云いますと、鎌倉時代、晩年に郡上に来た東行

氏の父胤行が美並村の戸谷にあった長滝寺(ちようりゅうじ)道場を改修して庵を結び信仰と歌の道に余生を送つたところです。戸谷川という川が流れておりまして戸谷庵という言い方をしますが、今の乗性寺の起源になります。そこが東家の菩提寺です。お母さんもそちらへ入られたと思われます。

その頃が天正八年(一五八〇)頃だと思ふんですけど、石山合戦が信長と本願寺勢力の間で一〇年間ほど続きまして、天正八年に和睦になりました。和睦にあくまでも反対したのが顕如の息子の教如です。やがて教如は東濃の方へ逃れてきました。

最初岐阜へ行ったそうですけども、ここは信長の勢力下で飛んで火に入る夏の虫、他の所へ行つてということ、郡上の奥明方村の西気良ということで、郡上へ逃げ込まれます。西気良への道は乗性寺の前を通りますので、その時に乗性寺に寄られたのではないかと思います。

そこでお千代さんのお母さんも教如上人と会われて、教如さんは信長と徹底抗戦している人、自分の夫も信長と徹底抗戦した人ですから、互いに気脈が通じるわけですね。また教如さんのお母さんは和歌の名家である三条西家出身、千代のお母さんも東家の娘であることを話されたかどうかは分かりませんが、話題に出たとも考えられます。

ということで、お母さんは教如に発心されまして、照用院殿釈(てらしよ

ういんどのせき)友順尼という法名を頂かれました。その時に友順尼に付き添つていた殖生(はぶ)太郎左衛門尉高照という人がおりますが、この人も同時に発心されて西教房照山となり、後に乗性寺一七世となられました。

信長が天正一〇年に本能寺で亡くなりますので、教如はそれを聞いて本願寺へ戻られたのだらうと思ひます。ですから二年近くこちらへ隠棲されていたと考えられます。これはこちらの記録にありますし、「鷲森旧事記(さぎのもりくじき)」という記録にも書いてあります。

教如さんは山上源太夫という浪人の名を騙つて、八代八右衛門という方が付き添つて世話をしていたそうです。今も教如屋敷が西気良にありますし、八代八右衛門の板碑もあります。

それと郡上説の重要なポイントになる土佐藩に伝わっていた『古今和歌集』の話がありますね、そのことを話してください

見性院は元和(げんな)三年(一六一七)に亡くなるんですが、その時に妙心寺の湘南和尚を呼びまして、二代目の山内忠義にこれを渡してほしいと頼んだ見性院の形見があります。遺品の品々と一緒に『古今和歌集』『徒然草』が入つていたという記録が残っています。

それ以後の山内家の記録を見ますと、元禄一三年に將軍家へこれらの品々を献上しています。その中に東常緑直筆の『古今和歌集』があります

て、それを五代將軍綱吉のお母さんの桂昌院に渡しています。それ以外にも冷泉(れいせい)家の初代の冷泉為相(ためすけ)直筆の古今和歌集が山内家に伝わっており、これも將軍家へ献上されておりました。

最後に大きな謎ですけど、国宝の高野切(こうやぎれ)、これも山内家にありました。高野切れというのは説明しますと、『古今和歌集』編纂の一五〇年後に能筆家が書写した現存最古の『古今和歌集』の写本です。

安土桃山から江戸時代に観賞用として巻物をバラバラにして、それを床の間に掛けたりしました。そういうバラバラのものを古筆切(ぎれ)と云いますが、高野切というのは高野山に伝存していたのでそういうふうです。これを高知県が七徳田(ななとくでん)で山内家から買い上げましたが、賛否両論で新聞の大きな話題になりました。

これがどこから山内家へ入つたかということですけど、記録には無い訳です。見性院の形見の中に『古今和歌集』があつた。見性院はどこで手に入れたかということなんですけれども、遠藤家の娘だとすると一応の説明が付く訳です。

本家でも戦争がありましたんで、遠藤家がそれを手に入れて、娘の嫁入り道具に持たせた。あるいは一豊さんが亡くなった後、見性院が京都に行つておりますので、京都で手に入れたということも考えられますね。

それとも一つ言っておきますと、千代さんが亡くなった翌月の元和四

年正月に、遠藤慶隆の弟慶胤(よしたね)の末子三十郎が、江戸で「御由緒(ごゆいしよ)を以(もつ)て」という但し書きがついて召し抱えられました。これは明らかに見性院が生前から二代目の忠義に言いつけていたことだと思われます。見性院には子どもさんがありませんでしたので、自分の血筋をどこかに残す、あるいは在所に恩返しつていう気持ちがあつたのかも知れませんが、これには三十郎が後に名乗つた通称安易右衛門(やすえもん)の名前もありません。

この三十郎さんの子孫に三作という方がいました。三作さんが土佐藩に提出した差出系図が残っています。これには三十郎が後に名乗つた通称安易右衛門(やすえもん)の名前もありません。

差出系図というのは家来の人が代替わりに殿様に提出した系図です。これには、二六郎左衛門尉(のじょう)盛数女(むすめ)、慶隆、慶胤妹山内一豊公御室(おんしつ)と系図に之(こ)れ有り」と明確に書かれています。

高知県立女子大学名誉教授の丸山和雄先生が、電話帳を頼りに調べておられ、子孫の方に出会われました。高知県南国市に平成一〇年頃まで生存しておられた遠藤晴海(はるみ)さんという方がその人です。

その方のお話では、郡上のことは聞いている。そういうことを人に言つたけど全然相手にされなかつたので、それからは先祖のこういう系図があるということと言われなかつたそうです。

春季日帰り研修

古都奈良の文化財を訪ねて

村井紀幸

四月一日(木) 二十七人の参加で研修先の奈良興福寺と国立博物館の見学をした。前日に四月では珍しい一五センチメートルもの積雪があり、旅行当日も朝まだ雪が残るほどだったが終日好天気日程を進めた。

■車内での研修■

奈良までの道中、会員の方々から興味深いお話を伺った。

▽田代全廣さん(剣)

御先祖である漢方医田代一養が目葉を作っていた。宝暦騒動では総帳元として活躍した。

茶釜に口と取手をつけて税金逃れをしたカナモリヤカンのこと。

田代冠者の伝承(源頼朝と不仲になった義経一行の奥州への逃避行の途中、田代信綱が当地に残り頼朝の追手を攪乱しようとした)などについて事細かに説明していただいた。

▽大井正明さん(万場)

お寺を拝観するときには、その寺の「山号」「寺の名前」「宗派」「本尊」「開基の年代」をポ

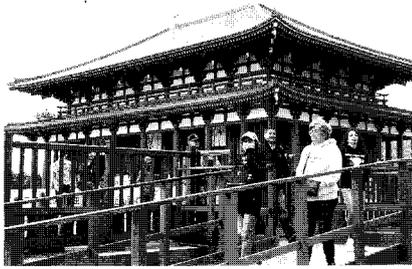
イントにするとよいと教えていただいた。

▽金子徳彦副会長さん(古道)

一口に「古今伝授」と言っても「堺伝授」「近衛伝授」「奈良伝授」「御所伝授」などがある。東氏の出で建仁寺両足院を開山した龍山徳見の弟子として中国から帰化した林浄因が日本に饅頭を伝えた。

林家の七代目林宗二(名産奈良饅頭の元祖で連歌師でもある)が、その師牡丹花肖柏から古今伝授を受けたのが「奈良伝授」である。

■興福寺■



興福寺 真新しい中金堂

国宝館(食堂(じきどう)の中には、国宝級の仏像が多く陳列されていた。修学旅行生の一団と一緒に入場したので混雑気味であり、あまりゆっくりは仏像を鑑賞できなかった。

中でも特に目を引いたのが阿修羅像で、一五センチメートルと比較的小さい印象を受けた。もとはインドの戦いの神であったが、仏道に帰依して戦意



東金堂と五重塔

興福寺は、平安の世を席卷した藤原氏の氏寺である。春日神社と並ぶ広大な敷地に、中金堂、東金堂、五重塔等の大規模な建物がどっしりとした佇まいで聳え立ち、圧倒的な存在感を示していた。

周囲に建物規制があるのか、他の建物は一切視野に入らない別天地であった。

を消失したことを、か細くしなやかな六本の腕が物語るそうである。

乾漆像で軽くできているので度重なる火災の際も小脇に抱えて運び出すことができたのであろう。じっくり鑑賞するには、一時間という時間は短過ぎるよ



南円堂にて参拝

■奈良国立博物館■

七〇歳以上の入館は無料であり、さすが『国立』だと思っ

り、さすが『国立』だと思っ。仏像百体余りがガラスなどの遮蔽物無しで、直にいろいろな角度から細部まで鑑賞できるよ

うにしてあった。その素晴らしさに感動し、迫力に圧倒された。以前は、まるで倉庫の中の狭い通路を見て廻るかのような時期もあったようである。また、一体一体の仏像も陳列ケースの中にあっており、ガラス越しにしか拝観できなかった。

午前中の興福寺と同様じっくり鑑賞するには一時間という時間はあつという間であり、半日ぐらいいてもよさそうに感じた。

■まとめ■

今回の研修は、奈良県ということやや遠方ではあったが、バスが居心地よく交通アクセスもよかったので快適な旅であった。

車中で過ごす時間が、会員の人達から貴重な話題を提供してもらった。研修の場となったので、それはそれで大変有意義であった。

奈良は何といっても日本の文化の中心であり文化財の量質ともに他に比べようがないが、長い歴史に裏打ちされた一つ一つの文物はさすがに見応えがあるなあとつくづく感じた。

本当に良いものは、いくら悪名高い時の権力者であってもむやみに壊すことはできないし、そうした憂き目にあつたとしても心ある誰かの手によつてそと保護され、今日まで伝えられ残つてきているんだなあと感じた。

私たちもそうした心を大切に

秋季日帰り研修

滋賀県甲賀市と

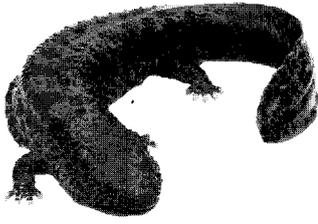
三重県津市の文化財を訪ねて

森 憲 司

一月七日(木)朝七時半
二四人の参加にて大和庁舎を出
発した。

研修先は、滋賀県甲賀市の樫
野寺と三重県津市の専修寺拝観
である。ぎふ大和インターより
関、御在所、亀山、上柘植と一
路甲賀市へと向かう。

■車内にてハザコ研修
車中では、村井紀幸さんより
国の天然記念物であるオオサン
シヨウオオの生息状況や生態・
習性などについてお話をいただ
いた。彼は、「日本オオサンシ



オオサンシヨウオオ(ハザコ)

ヨウオオの会」会員でもある。
村井さんの住居近くを流れる
小間見川は、数少ないオオサン

シヨウオオの生息地であり、少
年期にオオサンシヨウオオと接
したエピソードを交えて面白可
笑しく話された。

目は小さくほとんど見えない
が鼻はとても敏感である。口は
大きく餌を丸呑みする。歯は鋭
く細かい。小学校の頃学校にハ
ザコが飼ってあり、餌やり当番
までであった。自分もハザコに咬
まれたことがある。雨の日の夕
方、家の台所土間まで這ってき
たことがあった。等々。
楽しい時間があったという間に
過ぎ、早くもバスは午前の研修
地に着いた。

■樫野寺 いちいの観音

平安仏の多く集まる甲賀市の
樫野寺(らくやじ、いちいので
ら)を拝観した。

ここは天台宗比叡山延暦寺の
末寺で、十一面観音座像をはじめ
め薬師如来坐像などの国の重要
文化財に指定されている平安時
代の仏像が二〇体ほど安置され
ていた。

本尊の十一面観音座像は桓武
天皇の延暦一年に比叡山の開
祖伝教大師がこの地においてに
なったとき、霊夢を感じてこの
地の樫の生木に一刀三札の下、
彫刻安置されたと伝えられてい
る。重要文化財に指定されて
いる十一面観音座像では、日本
最大といわれている。



三メートル以上もある巨大な
座像で台座を含めると五メート
ルを超すような高さであり、こ
れを皆、見上げるようにして拝
んだ。

以前は三十三年に一度の御開
帳という秘仏であったが、現在
は春秋に一定期間特別公開があ
り、今回は丁度この特別拝観の
機会に恵まれた。

一行は一路津市を目指し、途
中名阪上野ドライブインにて休
息し、昼食には美味しい「松坂
牛すき焼き会席」をいただいた。

■真宗高田派本山専修寺

午後の視察先は、三重県津市

の専修寺(せんじゅじ)である。
真宗一〇派(真宗教団連合)の
中でも三番目に大きな真宗高田
派のご本山である。

門をくぐると正面に如来堂、
右側に御影堂が並んでおり、い
ずれも国宝である。

宗祖親鸞聖人の木像を安置す
る御影堂には、畳七二五枚が敷
かれており、全国の木造建築の
中でも五番目という大きな建物
である。



専修寺 御影堂

一方、如来堂は屋根を三
層にし、棟の高さを御影堂とほ
ぼ同じにしてあるそうで、建物
面積は半分程度なのに全く見劣
りしない。阿弥陀如来を安置す
る本堂としての威容を示すため
だという。

建物の中に入ると、阿弥陀如
来の仏殿にふさわしく欄間の彫



専修寺 如来堂

刻などが誠に華麗であった。
直径二尺もあるような太い
梁や柱など使用した木材の一部
は郡上から切り出したものであ
り、飛騨川で筏を組んで流し運
んだとの説明を受けた。遠く離
れたこの地のお寺が郡上と縁が
あることを聞かされて親しみが
湧き、今回の研修が一層感慨深
いものとなった。

後に副会長常平毅さんの調べ
によると、木材は郡上の弓掛山
(ゆかけやま)という所から切
り出したそうである。その山は
郡上の明宝小川と和良土京境付
近、そして下呂境付近であらう
と思われる。明宝小川からは弓
掛川が馬瀬川に合流し、飛騨川
へと流れている。運ぶにも長い
道のりである。

文芸欄

短歌

春 来

老木の穴あき耐えて幾とせぞ

大井 正明

今年も白き花ぞ抱えり

収穫時残す大根太くなりぬき

採り食すきさらぎの月

移り行く美濃の山路やなつかしく

いにしへの里訪ね歩まん

消失し鐘楼寺の長滝寺

復興の音は衆生の願ひ

叱るのではない

猪俣 初枝

ぼこぼこと障子やぶりて得意顔

叱るではない泣かすではない

一服の茶に活力をいただきし

今朝はじめての秋の風吹く

里芋に洒落た呼び名の衣被

ピアノの演奏老衣被

田畑の土の診断アルカリ性

小松菜光り露霜の朝

古

杜ふかき長滝神社

山内 敏子

白山の延命の水こくこくと汲む

雨上がり産土神の参道の

山紫陽花の咲きはこる朝

命日の七日か早めて墓掃除

安政二年の葉菊の笠は

しきたりは古きを守り遷宮の

神在月に出雲に拝礼

桜 花

渡邊 千恵

聳え立つ(神帰杉)ゆさゆさと七百年の

静かなる呼吸

天津風(神迎杉)揺るがして

山城の跡春間近なり

ほとほと疲れ

石神 堯生

「解ったか」何度叱責受けたやら

今も夢にでる数学授業

小水の音も臭いも薄れゆく

今夜も五度起きほとほと疲れ

押しもせぬパソコンの文字に困惑す

なぜだ違えたつもりなのに

人の名も物の名前も浮かび来ぬ

あれあれそれぞれ口癖となりぬ

俳句

桜 花

渡邊 千恵

椿落つ令和の御世となりけり

令和の燦燦たれよ桜花

風土に生きる

山内 敏子

忘れえぬ昭和のいくさ老いの春

仏壇の燈明を継ぎ年を越す

ひぐらしの鳴きつぐ声のものさみし

朝の日を受け墓の辺の彼岸花

令和元年度

事業報告書

四月 一日 (木)

春季日帰り研修

(古都奈良の文化財を訪ねて) 参加者一七名

一七日 (金)

「文化財やまと」 四四号編集会議

二三日 (木)

第一回郡上市文化財保護協議会理事会

二四日 (金)

第一回役員会 (大和庁舎三〇一会議室)

六月 二四日 (金)

令和元年度大和文化財協会総会、(大和生涯学習センター二階)

①平成三〇年度事業報告・決算報告

②令和元年度事業計画・予算の承認

③会報「文化財やまと」 四四号発刊 (発行部数二五〇部)

④記念講演「山内一豊夫人の出自」

郡上八幡地域史家 川上 朝史 氏

七月 二日 (火)

第二回執行部会

一一日 (木)

第二回役員会 (奉仕作業への取り組みについて)

二八日 (日)

東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃 (上剣地区参加)

二九日 (月)

第二回郡上市文化財保護協議会理事会

八月 七日 (水)

七日祭・薪能

二五日 (日)

上剣赤保木祭

九月 三日 (火)

研修部会 (秋季日帰り研修について)

一〇日 (火)

第三回執行部会 (秋季日帰り研修について)

二四日 (火)

第三回役員会 (秋季日帰り研修の計画・実施について)

一〇月 一〇日 (木)

文化財標柱設置作業

一三日 (日)

島七代天神社石造狛犬 万場熊野神社石造狛犬 木越城跡

郡上市文化財保護協議会 市内文化財巡り (担当白鳥町)

郡上の神楽 (石徹白巫女神楽と白鳥神社大神楽)

十一月 七日 (木)

秋季日帰り研修

一月 二六日 (日)

(滋賀県甲賀氏と三重県津市の文化財を訪ねて) 参加者二四名

二月 六日 (木)

第四回役員会 (事業・会計中間報告、当面の課題について、懇親会)

二二日 (木)

研修部会 (令和二年度春季日帰り研修の計画)

二五日 (火)

「文化財やまと」 四五号編集会議

三月 二六日 (木)

第五回役員会 (令和二年度春季日帰り研修、事業・会計報告)

第三回郡上市文化財保護協議会理事会 中止

令和二年度

事業計画(案)

四月 中旬

春季日帰り研修は中止

二二日 (木)

第一回郡上市文化財保護協議会理事会 (書面表決書にて)

六月 四日 (木)

第一回執行部会 (大和庁舎三〇一会議室)

六月 四日 (木)

令和元年度事業報告・決算報告

一七日 (水)

総会の持ち方・東氏郡上入部八〇〇年について

二七日 (土)

「文化財やまと」 四五号編集会議

七月 三日 (金)

令和二年度大和文化財協会総会 (書面配布にて)

一四日 (火)

令和元年度事業報告・決算報告

二五日 (土)

①令和元年度事業報告・決算報告

八月 七日 (金)

②令和二年度事業計画・予算案

三〇日 (日)

③会報「文化財やまと」 四五号発刊 (発行部数二五〇部)

九月 四日 (金)

第二回執行部会

一四日 (火)

第一回役員会 (奉仕作業への取り組みについて)

二五日 (土)

第二回郡上市文化財保護協議会理事会

八月 七日 (金)

東氏館跡庭園池泉清掃・阿千葉城跡清掃 (上剣地区参加)

三〇日 (日)

七日祭 薪能は中止

一四日 (金)

上剣赤保木祭

一五日 (金)

研修部会 (秋季日帰り研修について)

一〇月 初旬

第三回執行部会

二二日 (木)

第二回役員会 (秋季日帰り研修の計画・実施について)

二二日 (木)

文化財標柱設置作業

二二日 (木)

郡上市文化財保護協議会

二二日 (木)

市内文化財巡り (大和町担当)

二二日 (木)

秋季日帰り研修

二二日 (木)

第三回役員会

二二日 (木)

(事業・会計中間報告、当面の課題について、懇親会)

二二日 (木)

研修部会 (令和三年度春季日帰り研修の計画)

二二日 (木)

第四回執行部会

二二日 (木)

第五回役員会 (令和三年度春季日帰り研修、事業・会計報告)

三月 下旬

「文化財やまと」 四六号編集会議

三月 下旬

第三回郡上市文化財保護協議会理事会

会 員 名 簿 (順不同)

令和2年5月現在

● 顧問		
旗 勝 美 (剣)	88-2031	
日 置 敏 明 (大間見)	88-2254	
■ 剣		
田 中 和 久 (理事)	88-2200	
田 中 康 久	88-2200	
森 前 登 志 子	88-3479	
小 池 祐 二	88-4064	
田 代 全 廣 (理事)	88-3835	
田 代 寿 子	88-3835	
河 合 尚	88-2304	
日 置 智 夫	88-2730	
加 藤 典 子	88-3687	
武 儀 山 博 之	88-3401	
河 合 利 雄 (理事)	88-3520	
佐 藤 光 一 (名誉会長)	88-3201	
佐 藤 八 重 子	88-3201	
山 内 博	88-2886	
山 内 悦 子	88-2886	
加 藤 文 蔵	88-2802	
村 瀬 方 彦	88-2008	
日 置 武 雄	88-2303	
■ 大間見		
大 野 一 道 (理事)	88-2230	
大 野 紀 子	88-2230	
青 木 ユリ子	88-3477	
村 井 紀 幸 (理事)	88-2323	
池 田 充 彦 (理事)	88-2796	
小 野 江 勉	88-2725	
藤 代 順 行	88-3060	
松 井 賢 雄 (理事)	88-3991	
坪 井 由 佳 子	88-3990	
■ 万 場		
桑 田 守 夫 (理事)	88-2514	
石 神 堯 生	88-2413	
畑 中 真 智 子	88-2441	
稻 葉 和 巳	88-2503	
黒 岩 弘 己	88-2458	
桑 田 洋 一	88-2414	

青 地 正 男	88-2447
大 井 正 明 (理事)	88-2894
旗 清 子 (理事)	88-4170
大 中 登 志 枝	88-3624
■ 徳 永	
細 江 幸 久 (書記)	88-4157
細 江 和 子	88-4157
山 内 孝 一	88-2616
渡 辺 睦 子 (理事)	88-2076
遠 藤 賢 逸	88-4141
山 内 敏 子	88-2120
■ 神 路	
山 田 正 代 (理事)	88-2114
山 田 味 代 子	88-2844
山 田 敬 子	88-2336
野 田 加 奈 枝	88-3460
山 田 幸 子	88-2693
白 田 金 市	88-3883
白 田 路 子	88-3883
■ 牧	
齋 藤 武 生 (会長)	88-3922
齋 藤 純 子	88-3922
滝 日 一 正	88-3064
松 森 幹 男	88-3919
遠 藤 伝 司 (監事)	88-3934
日 置 光 一	88-3001
瀧 日 千 代 美	88-3059
三 浦 泰 治 (理事)	88-9080
三 浦 愛 子	88-9080
栗 飯 原 明 子	88-2362
日 置 人 司	88-2662
田 口 勇 治 (監事)	88-3950
遠 藤 高 真	88-2890
野 田 嘉 明	88-3043
金 子 政 子	88-3426
早 瀬 ふみ子	88-3327
■ 栗 巢	
野 田 恵 光 (理事)	88-4027
島 崎 増 造 (理事)	88-2236

寛 政 則	88-4031
増 田 洋 子	88-4041
道 家 稔 啓	
道 家 真 由	
島 崎 貢 一	
■ 古 道	
金 子 徳 彦 (副会長)	88-3063
細 川 優 (理事)	88-2861
松 井 清 治	88-3118
歳 藤 賢 雄	88-3983
■ 落 部	
常 平 毅 (副会長)	88-3837
常 平 真 由 美	88-3837
本 川 喜 代 士	88-3833
本 川 清 子	88-3833
柴 垣 諭	88-3239
柴 垣 香 久 子	88-3239
小 島 与 三	88-3814
小 島 洋 子	88-3814
■ 島	
奥 田 昌 明	88-2520
森 藤 雅 毅 (理事)	88-2684
奥 田 弘 親	88-2431
木 島 清	88-3304
森 藤 龍 史	88-2154
和 田 平 八 郎	88-4324
森 憲 司 (会計)	88-2554
田 中 篤	88-2792
山 田 長 次	88-3648
■ 特別会員	
大 和 観 光 協 会	88-2211
■ 賛助会員	
郡 上 大 和 総 合 開 発 株 式 会 社	88-2525

正 会 員 81名
 家 族 会 員 14名
 合 計 95名

◆◆◆ 令和元年度 決算報告書 ◆◆◆

◆◆◆ 令和2年度 予算(案) ◆◆◆

(収入の部)

(単位：円)

項目	決算額	摘要
前年度繰越金	6,318	平成30年度より
会員会費	170,000	正会員78名 家族会員14名
	36,000	特別会員2口 賛助会員3口
助成金	81,000	郡上市より
雑収入	0	
合計	293,318	

(収入の部)

(単位：円)

項目	予算額	摘要
前年度繰越金	2,295	令和元年度より
会員会費	176,000	正会員81名 家族会員14名
	36,000	特別会員2口 賛助会員3口
助成金	81,000	郡上市より
雑収入	5	
合計	295,300	

(支出の部)

(単位：円)

項目	決算額	摘要
総会費	16,510	記念講演(川上朝史氏) 総会お茶
会議費	6,540	執行部会 運営各部会 役員会
会議費小計	23,050	
会報発行費	57,564	会報「文化財やまと44号」250部
ホームページ運営費	5,466	さくらレンタルサーバー
奉仕活動費	6,260	文化財清掃奉仕作業 傷害保険
文化財保護費	8,400	七日祭 赤保木祭
研修費	80,231	春季・秋季日帰り研修補助 役員研修
記念事業積立金	70,000	定額貯金
事業費小計	227,921	
消耗品費・事務費	6,463	用紙代・印刷代等
通信費	13,589	はがき・切手 手数料
事務局費小計	20,052	
負担金	20,000	市協議会費
予備費	0	
次年度繰越金	2,295	
合計	293,318	

(支出の部)

(単位：円)

項目	予算額	摘要
総会費	10,000	総会資料
会議費	10,000	執行部会 運営各部会 役員会
会議費小計	20,000	
会報発行費	60,000	会報「文化財やまと45号」250部
ホームページ運営費	10,000	レンタルサーバー代
奉仕活動費	10,000	文化財清掃奉仕作業 傷害保険
文化財保護費	10,000	七日祭・赤保木祭 文化財 標柱設置
研修費	50,000	秋季日帰り研修補助 役員研修
記念事業積立金	60,000	定額貯金
事業費小計	200,000	
消耗品・事務費	10,000	用紙代・印刷代等
通信費	15,000	はがき・切手 手数料
事務局費小計	25,000	
負担金	20,000	市協議会費
予備費	30,300	
合計	295,300	

令和元年度の歳入・歳出処理について監査を行ったところ、適正に処理されていたことを報告いたします。

令和2年6月4日

監事 田口 勇 治

監事 遠藤 伝 司

(今回から印影は省略)

編集後記

今年度は春先から新型コロナウイルスの流行があり、社会に大きな影響を与えています。ウイルスのために命を亡くされた方々は本当に無念であつたらうと思ひ、深く哀悼の意を表します。また最前線で闘つてみえる医療関係の皆さまには敬意を表します。

さて来年は東氏郡上入部から八百年の節目を迎えます。いくつかの疑問に一つの解答を与えてくださった斉藤会長の説には、ああそうなんだとすごく納得がきました。

山内一豊夫人顕彰会長の川上朝史氏の千代郡上出自説には、なるほど明快な史料の裏付けと説得力があります。

自分たちの近くにある文化伝統や文化財の価値が、皆さんの研究で更に明らかになっていく事に大きな喜びを感じます。

未知のウイルスとの戦いがまだまだ続きますが、これも研究者の方々がきつと打ち勝つ方法を見つけてくださると思ひます。

皆様、感染予防に努めていただき、益々活躍ください。今後ともご意見お聞かせください。

(編集子)